

## 私の保育

——朝の出会いの中から——



水沼昭子

「せんせい まだ ようちえんやってる？」Yの朝の挨拶。「ええ、まだやってる。大丈夫よ」と答える。時計は午前九時少し過ぎ。子ども達が登園しはじめたばかりである。細く小さいYの肩が忙しく上下して、「ぼくネ、ずーっと向うから走って来たんだよ。」と言っているかのようだ。

私にとって大切な時間。それは登園する子ども達を幼稚園の門の前で迎えるひととき。さわやかな日、雨降り、風の日、暑い日、寒い日、さまざまだけれど、私は毎日、門の前で子ども達を迎える。その日、その日で違う、一三六人の子ども達の一三六通りの朝の挨拶を受けとめながら、その日の園生活がその子らしく

過せるようにと願う。

◇ ◇

「せんせい まだ ようちえんやってる？」は、Yの「せんせい、おはよう」である。かけこんできたYの後から母親の、困ったような、でもうれし気な姿が近づいてくる。つい二、三ヶ月前のYは、彼の近所のA子の蔭に小さくなって、私の前を通り過ぎ、母親期待の「おはよう」も言えない子であった。何事にもゆっくりのYは、入園当初から皆のペースに入り込めず戸惑っていた。

テラスを、ほんの少し動くだけでも、大仕事といった感じが伝わってくるほどであった。

Yの、そのままを受けとめながら、しばらくは様子を見た。家庭では、Yのペースを許容できずに、母親は手を出し、口を出す毎日であったらしい。テラスで、ただ立っているだけのY。先生が近づいたり、目が会ったりするだけで、オドオドする。何かしないとしかられるかと不安気な表情を向けて来た。しかし、「立っているだけでも、先生はおこらないぞ」「ここにいてもいいらしい」「そのような思いが彼にわかってか、少しずつ安定し、テラスから園庭へと動きはじめ、あちこちでYの姿を見ることができるようになった。

友だちの遊ぶ様子を眺めては楽しそうにしている姿がそこにあった。このようになって来た時期、誰の場合も私は心によくよく言い聞かせる。「もう少し待って！もう少しだから。そのまま見守ろう」と。背中を押せば、手を引けば入って行くだろう遊びの輪に、Yが一人で入って行くのを待った。「テンテイ、ナニチテルノ」とYがはじめて友だちの遊びの中に入ろうと近づいて来た日、「よく来たわネノ」と遠来の友を待っていた、そんな気持ちで遊びに加えた。それからしばらくは「Yちゃんは先生のおしり虫」とみんなに言われる位、後からのそのそついで行動する日が続い

た。

だんだん友だちの中にいるYが自然の姿に見えて来た。ところが、ゆっくり動き出したYに、お姉さん気取りのA子がお節介をするようになった。A子はまるで、「幼稚園では私がYちゃんのお姉さん」と言った風で、Yの行動、Yの言葉に一つ一つお節介をやく。Yの今までのもたつきとは違った状況でA子も又、皆の中に入れない子であった。A子にとってYに「お姉さんぶる」事が、彼女自身の園生活を、まずは安定させるようであった。Yのオドオドした行動が再び目につくようになる。A子の「お姉さんぶり」が加わる。この状態を、とにかく、YとA子にとって一つの刺激、ステップにさせたいと願った。内心「Aちゃんお手柔らかに……」とも願った。

やがて、二学期末になってこの関係がくずれれる時が来た。A子が病気で二週間ほど休園したのである。Yは久し振りに、Yのペースで動きまわるだろうと考えていた私に、所在なさそうな態度を見せた。園庭のテーブルに、ポツンと一人でいるYに「Aちゃんいなくて、さびしいネ」と近づいた。「Aちゃん、お熱あるんだってヨ、かわいそうだね」との返事。子ども達の関わりの不思議さを知らされたと同時に「お姉さんA子」を制する事をしなくてよかったと思う。さらに驚く事が起きたのである。久し振りの

登園に大はりきりのA子が、例のごとくYにお姉さんぶりを発揮した。その時、Yは「いやだよ、いま、これがしたいの！」とほっきり拒否したのである。Yの内面で何が変わったのだろう。A子も、まわりにいた子達も先生もびつくりした。その日の記録に「本日、やっとY君本格的入園!？」と書き込んだ。本来Yの持つ力が一度にふき出したような毎日ではじまった。小柄で、多少赤ちゃんな言葉が残り、動きも相変らずゆっくり、A子にも時折、ふりまわされるけれど、Yが全身で「ぼくネ、幼稚園、大好き!」「いっぱい遊ぶんだ」と叫んでいるような気がする。

「せんせい、まだ、ようちえんやってる」「まだ、いっぱいあそべる?」「いっぱいあそぶんだ。」Yのこの挨拶を受けとめながら思う。「お友だちと遊ぶと楽しいよ」と手を引っぱり、背中を無理に押さなくてよかったと。「ちいさいくみきたらネ、てっぽうつくつてやるんだ」と、うれしそうに春休みに入ったY。年長組での初登園日に、どんな朝の挨拶を投げられるのだろうか。



雨降りの道を、小さな点が二つ幼稚園に向ってくる。小さい点はやがて、人の形となって近づく。青い雨傘に、大きめなレイン

・コート。水たまりも石ころもかまわず走ってくる。Kの登園だ。その後から傘もささず、赤いウィンド・ブレーカーを着た母親が、Kを追いかけるようにして来る。私の待つ門の前でビタッととまるK。「Kくん、おはよう!!」私の声など聞こえないかのように、後からくる母親をじっと待つ。頭からびしょぬれの母親がおいつく。「今日も大変でしたね」と傘をさしかける。

「テッタイヤンカ!!、テッタイヤンカ!!」Kが母親に叫ぶ。母親は「テッタイヤンカ!!」とくりかえし彼に言葉を返す。次は傘をもつ私に向って言う。「テッタイヤンカ!」私も同じように言葉を返す。そしてやっと「ミミズマセンセ、オハヨイマス」と首をビョコリと動かしして園庭へ入って行く。Kの朝の挨拶、朝の儀式である。Kが入園してきたのは一昨年の四月。言葉に遅れもつての入園であった。その時四歳三ヶ月、立派な体格、日焼けした子どもらしい表情、多少、おちつかずに動きまわるけれど、すぐに慣れて行くだろうと感じさせた。このKとの出会い、毎日の園生活を通して、それまでの自分の保育が問い直され、打ちくたかれていったのである。

「待つことを大切に——」「その子らしさを認めたい」「あるがままの姿を大事に——」など抱えきれないほどの思いと、確かに歩いて来た十数年の現場での子ども達との生活の体験の重さを両手

に、Kを受けとめるつもりであった。しかし、そのような思いが、いかに薄っぺらなものであったか、すぐに思い知らされた。私の考えを越えた「事」や「物」で動きまわり、奇声をあげるKを前に途方に暮れた。いったい、この子のどこから、どうしていったらよいか。いや、特別な子と見てはいけない。まず動きまわらせてみよう、それからだ——、などの思いが交錯する中で園生活が始まり、毎日が過ぎていった。

ある時、思いあぐねてKの専門的指導をしている先生をお訪ねした。その折、「何をどうしようと考える前に、誰が彼との心をつなぐことが出来るかを、まず考えてほしい」と指示を受ける。自分の小さな枠の中の行動をとらえていた私にとって、Kはやはり普通の子ではないと言う無意識の思いが心を覆っていたことを知らされた。この指示は、いつも私自身、入園する子どもに対して、こころしていた事ではなかったか。まず、あるがままの姿を認めて、安定の場をみつけさせよう。それが「物」でも「場所」でも「人」でもいいのだ、そこからすべてが始まるのだ——そう、こころしていたではないか。なぜKに対すると、これらの事が忘れられてしまったのか。指示された事柄を思いながら大変ショックだった。その事の中から、今までの自分の保育のすべてが問い直された。いかに限られた小さい枠、しかも、自

分が許容できる枠の中でしか「待つ」とか「一人一人の子らしさ」をとらえていなかったかを知らされていった。

Kを受けとめるために、もう一度、私の保育観をくだいで行こう、そのために、他の子をしつかり見直そう。子ども達の一人一人を受けとめよう、違いを知って行こう。その姿勢の中から、Kを含めて子ども達一人一人の子らしさを無理なく受けとめられるようになって来た。「待つ」ことの長さをKの時計にあわせよう。自分の言葉でなく、Kの言葉で話すことからはじめよう。私のルールではなく、まずはKのルールで。こうした歩みが少しずつKとの心をつなぐものとなっていった。「また、高いところへのぼっちゃって!」のつぶやきが、「ヨーン、先生もそこまで登るゾー」に変わった頃、Kの園生活は驚くほど安定していった。Kをみつめた目や心で、他の子ども達の園生活を見直した時、彼らの何気ない行動や活動、ことばなどが、その子の今、必要な事として、まず認めて行こうと思えるようになって来たのであった。それ以後のKとの関わりは、山、また山のくりかえし。いつも、チャレンジしながらの毎日である。けれど、その都度、すべての子ども達の生活を通して答を求めて行けるようになっていく。「テッタイヤンカ!!」はKの発明語である。どんな意味だろうと考えたこともあったが、今はその時々で、いろいろな表現を

もつ「テッタイヤンカノ」を、Kと同じ表現で返してやる。Kに  
とって、登園を確認する、この言葉が大切に思えた。卒園を間近  
にして、仲間の大騒ぎの中で「うるさいナ、もうー」と叫んだK。  
それまではオーム返しがほとんどだったKがである。そして、卒  
園の日、いつものように幼稚園の門を丁寧にしめて、「サオーナ  
ナ」と深く頭をさげた姿を目にして、今度は小学校で、誰が「テ  
ッタイヤンカノ」を受けとめるのだろうか、フト、思った。



「先生、いろ紙今日もでてない？」元気なMとD。おはようの挨拶も忘れての質問である。「そうよ、だしてないわ、おはよう／＼と返事をする。「やっばり、でてないんだよなあ」つまらなさそうに門を入った。十一月の事である。このつまらなさそうな顔には、わけがあった。その二週間ほど前、昼食後の遊びが再開されて間もなく、M達に呼ばれた。「先生、いろ紙なくなつたよ、だしてー」と。その頃、手裏剣作りが大流行、何枚もいろ紙で折っては、手の中に入れて忍者よろしくシュシュとばす。年長も年少も大好きな遊びになっていた。呼ばれて行ってみると、いろ紙箱の中には、しわをのばした、いろ紙が丁寧に入れてある。破けて

もない。「ちゃんが入っているじゃない？」と言う。「ナー、こんなのかっこ悪いもんナ」との返事。

その日から新しい「かっこいい」いろ紙は、子ども達の前から姿を消した。保育後のミーティングで話しあって、どの部屋もそうした。折ってしまった、もう遊ばないいろ紙を、ひろげて、折り目をのばして箱に入れた。たしかにクシャクシャの、しわのある手裏剣は「かっこ悪い」かもしれない。けれど次から次へと新しいいろ紙で「かっこいい」手裏剣を作って、シュシュとばす。そこに何が育つというのだろうか。「クシャクシャだつて破れていないけど——」といい続けて何日も過ぎた。「やっばり、でてないんだよ、新しいのが——」の朝のつぶやきはそんな時であった。

この手裏剣作りは大変な人気で、どの子の作り方がよくとぶとか、色がきれいだとか、何個もっているとか、大半の子ども達がまきこまれるほどであった。しかし、新しいいろ紙が姿を消した日から、少しずつ、この遊びは停滞。今まで作った分で満足、ポケットに入れていけばいい、まるで忘れられた遊びと思える日さえあった。私たちにとって大変ショックだった。あんなに夢中に作り、大好きな遊びが「かっこいい」材料が無いとまるで、今までの大流行はうそのように、忘れられた手裏剣作りとなった。そ

のことにショックだった。しかし、相変らず、クシャクシャのいる紙を出し続けた。内心、子どもの遊びをうばったかとの思いをおさえながら——。けれど、とうとう、ある日、一枚、二枚という紙箱から、クシャクシャいろ紙がなくなつて、ちよつと「かっこ悪い」けれど、でも皆の大好きな手裏剣遊びが再開された。「よかつた」と胸をなせおろしながら、これは当り前のことなのよと言つた表情で彼等の中に加わつた。「乏しさ」の中に育つ大事な事を考えてみたいと思つた。



子ども達がそれぞれの思いを持って登園してくる。ゆっくり歩いて、かけ足で、つまらなそうな顔で、一人で、数人で——そのいろいろな状態を門の前で受けとめる朝。この重さは私にとって大変なものである。「今日は元気がないナ」「少し調子に乗りすぎカナ」「また、しかられたのか」「元気でいいゾ」時には出会ひの重さにつぶされそうになる。ちよつと用事で数分、迎えの場がない時、登園して来た子ども達は、わざわざ私のところへやってくる。「せんせい、おやすみかと思つたよ」「今日ネ、泣かないできたの」この子ども達一人一人にどんな園生活を与えようとして

いるのだろうか。一人一人を、どれだけ深く知り、関わりようとしているのだろうか。自分の力の小さいことに比べて、子ども達の可能性の大きさを思うと足が竦む。重いナァと思う。その反面、もう後にはひけない気持をもっている自分、矛盾しているかもしれないが正直なところである。

フト溜息をつく、隣りからも溜息が——重くても一緒に考え、一緒に悩み、この保育を背負う仲間がいる。毎日の保育後のミーティングで、ほんの小さい出来事をも見逃さないで話し合い、積み重ねようとする仲間がいる。夢中に議論しあえる仲間がいる。そのことを思うとき、私の保育は、私達の保育なのだと思ふから思うのである。

電話が鳴つた。

「先生ノ 今日、T子がタンポポの花束もつて帰りました。私の好きな水色のリボンで結んでありました。幼稚園のタンポポなんですってね。花束なんて、何年ぶりかしら——」。母親のうれしそうな報告を聞きながら、明日の朝、どんな表情のT子を迎えられるのだろうかと思はずむ思ひになった。

(千葉県・愛隣幼稚園)